

タイトル:平成 28(2016)年度 研究セミナー(第 17 回)

日程:平成 28 年 12 月 16 日(金)~18 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「サファヴィー朝期における工人と詩人

— ペルシア語詩人伝からみた工芸史、工芸品からみたペルシア文学史

神田 惟 (東京大学大学院)

イスラーム★中東研究セミナーの存在を知ったのは、所属する大学院の図書館に貼ってあったポスターがきっかけであった。担当スタッフ一覧を見てすぐさま受講を決めた。かねてより自分の研究の方向性を相談させていただきたいと一方的に思っていた先生方がいらっしゃったからである。アウェーな環境で、しかも「美術史」というディシプリンが募集要項にないという状況であったが、結果として、期待以上の収穫を得ることができ、応募して良かったと思う。

私の博士論文テーマは、「ティムール・サファヴィー朝期イランの工芸とペルシア語文化」である。工芸品(陶製品、金属製品、テキスタイル)と工芸品に銘文として刻まれたペルシア語詩、そしてそれらの制作に携わったエージェント(詩人、工人)を見ていくことで当該時代・地域の社会経済状況を復元する試みである。本セミナーでは、博士論文の1章分にあたる、「工人と詩人」というチャプターの内容を紹介した。報告内容の一部は既に査読付国際誌に受理されていたものであったが、特に近藤先生と高松先生から、議論をポジティブに補強するような貴重な提言の数々を賜り、多くの気づきを得て内容を改良することができた。この機会がなかったら、原稿を修正する機会を一生逃したままであっただろう。加えて、博論全体についても、歴史学にはつきものである「史料的制約」という最大の難関をどう克服するかについて、最良かつ最適ナリスクヘッジのやり方をアドバイスいただいた。

本セミナーを博士論文執筆という長く険しい道のりのどこにどのように位置づけ、また「活かす」かについては、受講生各々の裁量に委ねられている。とはいえ、事前に入念に準備し望んだほうが、得られるものも大きいただろう。業績になるとはいえ、オフィシャルな学会発表で一人の報告者が自身の研究内容を話す事ができるのはたかだか 15~20 分であり、オーディエンスは選べない。ところが、本セミナーは、1 時間も話せるうえ、必ず、中東★イスラーム研究の最先端を行くトップクラスの研究者の方々に辛抱強く聞いていただけるという類稀な機会である。他ディシプリンの研究者が「引用できる」美術史学研究が私の目標であるが、今回、多岐にわたるバックグラウンドを有する受講生の方々や担当スタッフの方々に正面から研究発表に向き合っていたことで、自身の研究に足りない部分を自覚し、自信にも繋がった。感謝に堪えない。

一つ残念な点があるとすれば、発表本番に機材トラブルがあったことである。具体的には、デスクトップに表示した発表者ビューが、そのままスクリーンに反映されてしまい、若干発表開始が遅れた。手元に要点を書いたノートを持っていたので事なきを得たが、仮に設備が最新のものでなかったとしても、開室時間をもうすこし早めるか、初日に機材動作確認の時間を設けるかすることで、慌てずに発表を開始することができたのではないかと思う。しかし、総じて、満足度の高い有意義なプログラムであったと思う。